

「デジタル日記」を活用したよりよい人間関係づくり等の研究

～ 児童がマルチメディアを活用して作る生活記録の取り組みを通して～

高橋伸明* 1

児童が、デジタルカメラで写した写真を使って朝・帰りの会でスピーチをしたり、その写真にコメントを付けて教室へ掲示したりする活動を一年間継続した。その結果、映像リテラシーやプレゼンテーション能力の育成に成果が見られ、さらにお互いの存在感を大切にしながらよりよい人間関係を築こうとする学級の雰囲気も現れてきた。反面、当初目的の一つに挙げていた家庭との連携を深める手だてとしての役割は、十分に果たすことができなかった。

<キーワード>人間関係づくり、映像リテラシー、プレゼンテーション能力、マルチメディア

1 はじめに

本研究の出発点は、以前実践したことのある「児童が自分で毎日書く家庭通信」にある。これは、学校でその日にあったことや印象に残ったことを各児童が自分の視点でミニ新聞に書き表し、児童相互・教師による評価を行い、ファイルに綴り、家庭に持ち帰る、という取り組みである。この継続は、児童の文章表現力の育成、児童 - 保護者 - 教師の人間関係づくりに大きな効果をもたらした。

第5学年担任としてスタートした平成12年度の学級経営案を作成する5月、「児童の実態に見られる課題」とそれに基づいた「育てたい児童像」を、以下のようにとらえていた。

児童の実態に見られる課題

(学習面)

- ・教師や友だちの話を中心して聞く習慣
- ・文章の内容を読み取る力や自分の思いや考えを表現する力
- ・自分の考えを分かりやすく伝える力
- ・友だちの考えを生かしたり比較したりしながら話し合いを深めていく学習形態

(行動面)

- ・学級全体のことを考えて自発的に行動
- ・協力して活動を盛り上げていこうとする
- ・男女間の交流
- ・グループ作りの際の要配慮児童

在籍21名（男子11名 女子10名）

育てたい児童像

- ・自分の考えを進んで表現できる児童
- ・友だちの考えや気持ちが分かる児童
- ・共に学び合い共に高め合える児童

育てたい児童像を実現するためには、言葉を換えれば「よりよい人間関係を築くこと」「伝えたいことを相手に分かりやすく伝える力を育てること」が特に重要であると考えた。そのため、前述したような家庭通信を実践することは大変有効な手だてとなる。本年度はここへマルチメディアを導入し、そのよさを生かした取り組みに発展させたいと考えた。マルチメディアによって、何気ない日常生活の継続的な営みに特別な価値を付加したり、教育的な効果を高めたりすることができるからである。

本研究は、マルチメディアを活用した日々の地道な活動を通して、どの学級にもありがちな諸課題の解決を目指した取り組みである。

2 研究の目的

デジタル日記の活動を通して 児童同士のかかわりを深め、共に考えたり喜びを共有したりする場づくり 児童の様子を頻繁に家庭へ伝え保護者からの評価を得る場づくり、等を行う。このことが、学級経営を円滑に進めるために必要な、よりよい人間関係づくりの一助となるかどうかを考察する。また、自分の思いや考えをまとめたり相手に分かりやすく伝えたりする能力の育成のために、マルチメディアの特性を生かした本実践が有効かどうかということについても考察する。

* 1 岡山県笠岡市立金浦小学校 (nob-taka@mx1.tiki.ne.jp)

3 研究の実際

(1) 実践内容

児童と共に「デジタル日記」と名付けた一連の活動を、図に表すと以下ようになる。

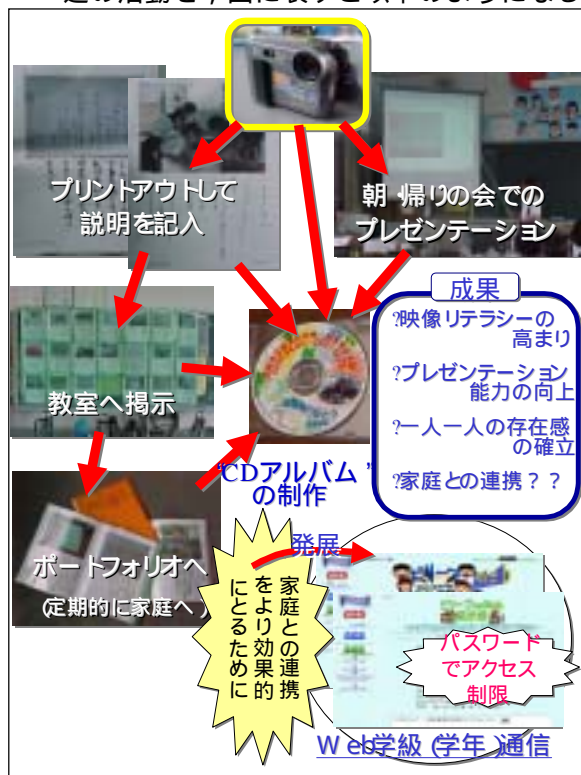


図1 デジタル日記の活動イメージ

休憩時間等を活用して

一人一人の児童が学校生活の中で「がんばったこと」「友達と協力して取り組み、成果が上がったこと」「友達のよいところ」等を見つけて、デジタルカメラでその様子を記録した。一定の視点をもたずに「何でもいから写そう。」という構えで実施してもそれなりに学びは期待できるが、しばしば児童が「何を写せばよいのか。」と、目標を見失うケースも生じた。教師が話題を提供したり「今週は『特集』で行こう」等とテーマを設定したりすることによって、活動の活性化を図ると効果的だった。

その後、撮影したデジタル写真はプリンタで印刷して手書きのコメントを書き加えたり、プレゼンテーションソフトで加工して印刷したりして、掲示物として再構成した。本実践ではフロッピーディスクに保存するタイプのデジタルカメラを活用したので、個々のデータ管理が容易にできてよかった。なお、

コンピュータの台数・活用時間に限りがあるので、必ずしもコンピュータによる作製にこだわらないようにした。

でき上がった掲示物は、教室内の「デジタル日記コーナー」へ常設掲示した。新しい掲示物ができるたびに自分で張り替えるようにしたので、お互いの最新の掲示物をいつも見ることができた。そして、掲示物に対する相互評価を行うために、全員が意識して見る時間を定期的に設けたことも効果的だった。こうした取り組みも、一人一人の存在感を大切に考えるきっかけづくりになったと考える。

さらに、作った掲示物は掲示した後に“ポートフォリオ(クリアファイル)”へ綴っていた。一年間の営みを振り返る際に有効な材料となった。しかし、このポートフォリオは、当初定期的に家庭へ持ち帰り「評価」を受ける材料と想定していたが、その役目を果たすことはできなかった。詳しくは後述する。

朝の会・帰りの会を活用して

その日の日直にあたる児童が、コンピュータ・大型モニタ・液晶プロジェクタ等で写真を提示して、プレゼンテーションを行った。そして、全員で写真の写し方や写っているもの・話の内容等に関する質疑応答を行った。児童が映像リテラシーに関する視点も人間関係づくりに関する視点も共に大切にできるように、教師はプレゼンテーションの仕方や写真の写し方についてコメントしたり、話し手のよさを認めながら今後の活動に示唆を与えるような助言をしたりした。

学年末の取り組み

最後の授業参観では、一人一人が撮りためた写真の中からこのクラスで過ごした一年間を最も分かりやすく伝えられるものを自分で選び、選んだ理由について明確にしながらプレゼンテーションを行った。そして、あらかじめ決めた視点に基づいて、一人一人のプレゼンテーションに対して全員で評価を行った。日頃より大切にしている「児童と共に決めた5つの評価項目(3(2)へ表記)」が達成できたかどうかも点数で示し、相互にコメントを加えながら進行していった。よりよい人間関係づくりに役立った営みを想起したり、映像リテラシーの高まりを確かめたりしなが

ら、一年間を振り返ることができた。

その後、全児童が撮りためた全ての写真や教師が写した写真・メッセージビデオをCD-ROMにまとめ、全児童に贈った。児童との営みを通して得た、教師の喜びや感謝の気持ちを伝えることができた。

Web学級通信

計画段階では「児童が綴ったファイルを家庭に持ち帰り、学校での様子を保護者に伝え、保護者から教育活動の評価を受ける。」ということ想定していた。しかし、定期的実施できなかったことや、保護者に観点を明示しなかったこと等が原因で、教育活動へ具体的に生かせるような評価を得ることができなかった。

その反省を踏まえて、児童と教師が写したデジタル写真を素材にした「Web学級通信(パスワード管理)」の取り組みを年度中途から開始した。これは、インターネットの特性「情報の双方向性」を生かして、保護者とのコミュニケーションを図りやすくしようと考えた末のアイデアである。電子メールや電子掲示板の活用を想定していた。



写真1 Web学級通信のトップページ

しかし、実際に運用を始めると、保護者による評価を「電子掲示板」で返していただくという方法には難しい面があることが分かってきた。児童が交流する場としてはある程度機能していたようであるが、保護者からの書き込みが意外に少なかったため、数名に聞き取り調査をしたところ、「皆さんに見られるので、思い切ったことが書きにくい。」「だれかが書いてくださったことに反応することはできても、口火を切って自分の意見を書くの

はちょっと...。」等という反応が返ってきた。

そんな中、ある父親は「...掲示板に毎日書き込みをすることで(うちの子にとっては)文章力の育成になりませんかd(^-^)!...。」等と積極的な書き込みをたびたびしてくださっていた。懇談や家庭訪問で一度もお目にかかったことのないこの方が意見を述べてくださる機会となったことに、大きな意義を感じた。さらに電子メールでは、より多くの保護者から反応を返していただくことができた。

Web学級通信は、現在Web学年通信へとバージョンアップされ、運用中である。こうしたWebページの教育的な意義等の考察は、別の機会に行いたい。

(2) デジタル日記を実践した成果

よりよい人間関係づくりについて

児童が一年間を振り返って書いた文章から、人間関係づくりに効果を発揮したことが認められる表現を、いくつか抜粋した。

「みんながぼくのことをスピーチしてくれたおかげで、ぼくのいいところがけっこうわかりました。自分のことは、なかなか考えてもわからないので、よかったです。」

「くんは、プレゼンテーションの時の言葉が、いつも工夫されていていいなあと思いました。」

「友だちは、私が全然考えてもないものを写していました。私は、気づけばいろいろなものがあるな、と友だちのプレゼンテーションに感心しました。」

「6年生になった時のクラスの人たちもいっぱい写して、友だちのよさをわかるようにしたい。」

学級の中で一人一人のよさ・存在感をお互いが認識し、大切にできるようになってきたことが感じられた。また、「デジタル日記の取り組みが、よりよい人間関係づくりに役立った。」という自覚が児童の中にもあるようで、これからも続けていきたいという意欲を表す記述が多く見られた。

例えば1でも記したように、本学級は当初異性の交流に大変な配慮を要する集団であった。放任すれば水と油のごとく男女別のグループができ、しかも必要以上に壁を作ってい

るように振る舞った。言うまでもなくその雰囲気は徐々に払拭されていったが、例えばA子のような女子は、最後まで自発的に男子へかかわることができずに終わった一人である。A子が一年間撮りためた写真のうち、フレーム内に男子の姿が収まっているものは写真2（左）のたった一枚であった。しかしA子は、最後の参観授業でこの写真を取り上げてプレゼンテーションをした。A子が一年間を最も分かりやすく伝える1枚にこれを選んだことは、デジタル日記が児童のよりよい人間関係づくりを寄与したことを象徴的に表していると考えられる。

伝えたいことを相手に分かりやすく伝える力の育成について

このことについても、成果が上がったことが認められる児童の文章表現を抜粋した。

「デジタル日記をやり始めてから、カメラを使って、どの位置からどんな角度で写真を撮ったらいいのか、よくわかりました。見やすくそして工夫した写し方ができるようになりました。」

「写真をとるとき、バックが明るいと本当にとりたい人やものが暗くなってしまうことがわかりました。」

「前は人前でしゃべることが苦手だったけど、日直の時プレゼンテーションをしていると、みんなの前で話すことがとても楽しくなってきました。」

デジタルカメラやコンピュータを「学習の道具」として自然に活用することができるようになった。また、写す目的がはっきりとした写真、相手に分かりやすく伝えようとする写真には、写し方にも工夫が必要であると



写真2 A子の写した写真（左）とB子がプレゼンテーションをする様子（右）

いうことを体験的にとらえることができた。特に映像リテラシーの高まりが感じられた。

さらに、児童が苦手にしてきた「伝えたいことを相手に分かりやすく伝える」場面を数多く経験し、それぞれの児童がプレゼンテーション能力を高めることもできた。写真2（右）はB子がプレゼンテーションをしている様子である。デジタル日記の場面に限らず、人前で話すときの5つの評価項目（口を開けてみんなに聞こえる声の大きさと目・顔をみんなの方へ向けてできるだけ止まらずに必要なことをまとめて分かりやすくモジモジ・そわそわしないで）を全員で話し合っただけで、意識的に相互評価を繰り返してきた。例えば、相手に分かりやすく伝えるためには原稿を読むのではなく、聞き手の顔を見ながら話すことが有効であるということは、全児童が経験的に理解した。人前に立って話すことへの自信が、こうした評価活動の継続により培われたものと考えられる。

4 おわりに

デジタル日記の取り組みは、よりよい人間関係づくりや映像リテラシー・プレゼンテーション能力の育成に対して一定の成果を残した。しかし3（1）に記した通り、家庭との連携に関する有効な手だては見つかっていない。仮に、Web上で保護者とのやりとりが活発にできたとしても、それは全ての保護者との間で成立する手段ではない。Webページを自宅で閲覧できない家庭も未だに多く、紙メディアを配付する感覚での情報伝達には程遠いものがある。

教育でのインターネット・マルチメディアの活用がますます盛んになり、それを否定する考え方に合う機会はありません。しかし、今一度その教育的効果や問題点を検討し、冷静に活用方法を考えていく必要性も感じられる。専門職としての我々教員は、デジタルデバイドに屈しないための努力を怠ってはならないが、この考え方をそのまま保護者の立場に当てはめることは乱暴である。むしろ、教員としての資質を疑われかねないものの考え方であると思う。